

日頃のネットワークが生みだす 仕事と活躍の場

社会福祉法人進和学園

理事長 出縄 守英

しんわルネッサンス・所長 今井 康巨

サンメッセしんわ・施設長 庭野 勉

社会福祉法人進和学園（しんわがくえん）が設立されたのは1958年。知的障害のある子どもたち30名の支援活動からスタートしました。子どもの成長にともないグループホームや活動支援施設を増設。1969年からは地域からの要望を受け保育園事業も展開し、地域と支え合い、連携しながら今年で設立63年を迎えます。

<http://www.shinwa-gakuen.or.jp/>



神奈川県平塚市を中心に障がい福祉事業、保育事業などあわせて18の施設を展開・運営する進和学園。なかでも就労支援事業においては、製品の品質に定評があるだけでなく、地方企業や行政とのコラボレーションなどのユニークな企画と運用が注目を集めます。

コロナ禍ならではの取り組みはもちろん、新たな活動をスピードを落とさずに展開していくヒントや、地域や行政を巻き込み連動していく秘訣について、社会福祉法人進和学園・理事長をはじめ3名の方々からコロナ禍において実施したことについてお話いただきました。

●これまでの活動について教えてください

進和学園は障がい部門と保育園部門を運営しています。2020年には学童保育部門を新設しました。障がい部門の利用者は入所施設・グループホームと通所施設をあわせて約500名ほどです。保育園にはお子さんが約300名おり、職員は約400名です。障がい部門の利用者のことは「ご本人」と呼んでいます。これはある日「利用者の方皆さん」と呼ばれて、それが自分のことだと気づかず、『ご本人』と言われることで自分のことだと理解できた」というエピソードからきています。進和学園の理念は「本人中心」です。また、進和学園の特色の一つに「障がいがどんなに重くても社会との接点をつくるために何かしらの生産活動に携わること」があります。

設立初期の昭和30年代後半からは、学校のトイレ清掃もしていました。今となっては清掃の外注は当たり前かもしれませんが、その当時は「何で障がいのある人に清掃をやらせるんだ」というクレームを受けたりしました。便所掃除のようにバツミたいなイメージもあったと思います。けれども、やっぱり働きたいとい

う気持ちがあったので、職員が一緒について行って市内の小・中学校を回り、教育委員会にも頼んで小・中学校のトイレや体育館の清掃を17年間やっていました。こういう風に働くことについて社会に訴えるということもしてきました。

1974年からは本田技研工業株式会社（以下、本田技研）と関係を築き、車の部品組立を継続して発注していただいております。今も大きな柱になっています。児童福祉法しかなかった時代から、就労支援やグループホームの前身のようなことを行ってきました。

●本田技研のプロジェクトはどんなきっかけでスタートしたんでしょうか？

本田技研に1974年から仕事をいただくようになりました。私の父（出縄明さん）が自宅を改修して進和学園を1958年に開設したんですが、その後、1974年に授産施設をはじめるにあたり、父の兄（出縄光貴さん）が本田技研に勤めていたご縁もあり、窓口会社「研進」（本田技研の「研」と進和学園の「進」とって命名）をつくり、仕事を受けられるようになりました。ありがたいことに47年経った今も継続して受注しており、工賃も全国的に高いレベルを維持できています。受け入れに際しては、ISO 9001（品質マネジメントシステムの国際規格）認証を取得し、品質管理に十分に気をつけながら車の部品組立を行っています。

●本田技研にはじまり、近年では新しいジャンルに次々取り組まれていきます



本田技研さんと信頼関係のなかで培ってきた品質管理のノウハウを食品加工にも展開しています。間引きするみかん（青摘みかん）の絞り汁を生地に練り込んだ『湘南みかんぱん』などの製パン、クッキーなどの菓菓を柱として行っています。なかでも『湘南みかんぱん』は人気が高く、2018年には「湘南ひらつか名産品」として認定されたり、ふるさと納税の返礼品として活用いただいたりもしています。食品加工をはじめるとなると、世界基準のHACCP（ハサップ）の認証も取得しました。

そのほかに農×福連携による六次産業化として自主製品の開発も約8年前から取り組みはじめています。その一つに就労継続支援A型・B型就労移行支援事業を行う、「しんわルネッサンス」が製造する『湘南とまと工房』というトマトジュースがあります。形が悪かったり傷がついたりすると販売できない地元湘南産のトマトを、完熟させて絞ることで無添加の逸品を作っています。

●製品をただ作るだけではなく、地域企業や行政と連携した企画であったり、販路などその後の展開がユニークなように感じます。この辺りをお伺いさせてください

平塚市は神奈川県沿海にあり、人口は約25万の市です。専門の農業学校や工業高校、特別支援学校、盲学校、ろう学校があり、そういった環境の中で地域作業所が25カ所あります。

物をつくっても売る場所がないという課題に対し、平塚市の障害福祉施策の一環として市役所ロビーの多



目的スペースに2014年7月に、ひらか障がい者福祉ショップ「ありがとう」が開設されました。現在、社会福祉法人、障害者団体連合会（当事者や家族が運営している団体）など市内を中心に30の福祉事業所が参加し、それぞれが一つになって福祉ショップ「ありがとう」をつくっています。

今回のコロナ禍において、この福祉ショップをとおしてマスク製作の話もいただきました。このように福祉事業所の縦割りではなく、行政も含めて協力し合ってやっているのですが、連携してやっていくこと自体は以前から行っているのです。スピード感をもって打ち合わせができるようになっていきます。

●コロナ禍ならではの取り組みはありますか？

就労継続支援B型を行う事業所「サンメッセしんわ」では『湘南みかんばん』の製パンや製菓を柱として、そのほかにも工芸、クリーニング、給食の事業があり、ご本人さんは希望で分かれて日中活動をしているのですが、工芸班では、さらし木綿の生地に染料で柄をつけて「染めふきん」という形で日頃から販売したり記念品として支援者に送ったりしています。

今回のコロナ禍で2020年の春頃、マスクが不足して手に入らないという時期がありました。ショップ「ありがとう」でも多いときには半日で全て売り切れてしまうなど、生産が追いつかず、実際に整理券を配ってでも買い求める人がいるくらいでした。そこで、ふきんを三つ折りにしてゴムをひっかけたらマスクができるという簡易のマスクを製作しました。神奈川県は「#リスペクトでつながろう」をコンセプトにプロジェクトを展開していて、共通のロゴデザインがあります。木綿の生地を立体型マスクにして、県のロゴシールを貼って販売をしました。

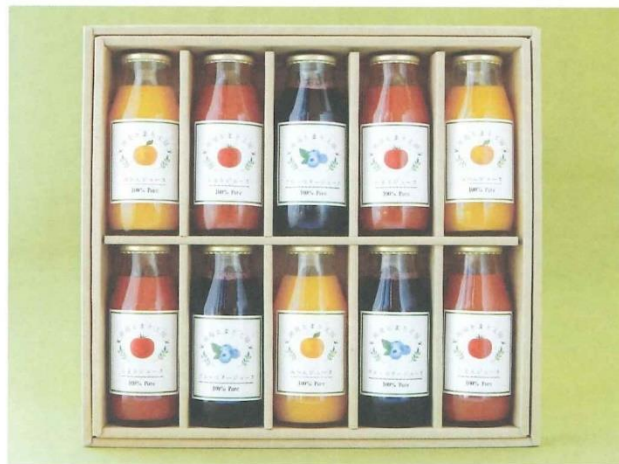
さらに平塚市には「手をつなぎたくなる街」というキャッチフレーズがあるのですが、市の障がい福祉課が企画し、「今はコロナで手を繋げないけど、みんな一致団結しよう」というメッセージを込めたマスクを作りました。マスクの生産に追われた時期は大変でしたが、社会に貢献でき、なおかつご本人さんの工賃に還元できたというところでは、もともと工芸班がやっていたからこそ生まれた発想で貢献できたことだと思います。

●『みんなの感謝お届け事業』も行政との連携プロジェクトの一つですね？

神奈川県は、新型コロナウイルス感染症対策のために医療・福祉・介護の現場で働く人や、そうした人たちを支えるボランティア団体などを支援する取り組みを進めています。支援の原資として、県民や企業からの寄附金を募集し「かながわコロナ医療・福祉等応援基金」を2020年5月から設置しています。この寄付金の活用先として『みんなの感謝お届け事業』があるんですが、具体的には医療・福祉従事者に感謝と労いの気持ちを伝えるため、県内3万6千カ所の医療福祉事業所にカタログギフトとして、神奈川県産品を贈呈するといったことをやっています。

しんわネットサンスも参加し、5千本のトマトジュースの注文をいただきました。『みんなの感謝お届け事業』を神奈川県から業務を受託した株式会社高島屋が、コロナで商品を販売する機会がなくなった障がいのある人たちを応援するため、プロポーザルの段階で福祉事業所の商品を活用する企画を持って入札をしたという経緯があります。

さらに、カタログの注文品に添えるプレゼントとしても採用してもらえたおかげで、結果としてトマト



ジュース2万4800本の注文をいただきました。原材料を確保するためにJA（農業協同組合）さんや個人の農家さんに片っ端から電話して、なんとか集まって準備することができました。

コロナで販売会も少なくなり、店頭に立つことや移動販売所に行く機会もなくなっていたときに、これだけドーンと注文がきて、非常に忙しい一方で、トマトジュースの瓶の裏に製造表示があるのを見て、受け取った医療関係の方々から「手づくりの品々に心から元気をもらいました」などいろんな感謝のメールや手紙をいただきました。こうした言葉はご本人さんのモチベーションになりますし、働きがいにつながっているという実感があります。

『みんなの感謝お届け事業』を通してサンメッセしんわは約1800セット、金額で言うと、手数料を引いて約160万円の収入がありました。予定していた販売会がコロナですべて中止になりましたが、その8割ぐらいはフオーでできました。地域が応援してくれたことでコロナを乗り越えており非常にありがたいです。

●地域企業や行政との日頃のつながりや関係づくりで工夫していること、秘訣があれば教えてください

基本精神は「断らないこと」です。地域社会からお誘いがあつたときには断らずに、とにかくやってみる、そうすると次につながるんですね。何がどうつながるかというのは予想もつかないときもありますし、信用されてくると手伝ってくれと言われることが増えてきます。いろんなことに呼ばれるようになり「進和学園さんがくると助かります」と言っていたこともあります。

地元のコミュニティ放送局である「FM湘南ナパサ78.3MHz」のラジオ制作にも参加をしています。ナパサ局は画期的で、市民にラジオの枠を開放していて、いろんな人が「ナパサクラブ」に加入して、各番組を持っています。その目的は、ラジオを通して地域の身近な情報を発信して「まちづくり」に貢献することと、万が一の自然災害時の防災情報などを市民目線で発信することです。福祉ショップ「ありがとう」のスタッフ有志で参加し、毎週月曜日19時から19時30分に「バリア！フリフリ天国」という福祉情報バラエティー番組を持って、当事者ご本人がパーソナリティとして活躍しています。特に進和学園のご本人と職員で結成した湘南バリアフリーパンチロックバンド「とびつきりレインボーズ」のメンバーが音楽コーナーを担当して、自分たちが演奏したライブ音源やオリジナル曲をラジオで毎回かけています。また自主製品のPRソングもつくって販売促進を図っています。ラジオ番組はJCB Aインターネットサイマルラジオで聴くこともできます。

食品の物販のつながりというと、平塚市の商工会議所を中心に、飲食・物販・サービスの商店主らがまちを元気にしたいと取り組む「平塚逸品研究会」という勉強会があるんですが、こうした勉強会にも積極的に参加をしてつながりやネットワークをつくっていききました。

実は、商工会議所に最初に出席したときは「なんで福祉が来るんだ？」「俺たちは生活がかかっているの



に、福祉は違うんじゃないか？」と言われたりもしたのですが、私たちはご本人さんの工賃のためにやっています、と大義名分を説明したところ、しっかり受け入れてくれて仲間に入れてもらいました。今ではイベントに声をかけていただくようになり、いろいろなコラボレーションや製品の開発なども一緒にやったりしています。

経済のなかに福祉（特にご本人）が入ると、私たちの存在そのものが緩衝材になったり、つながりをつくる接着剤になったりします。さらには、ご本人さんが一緒に販売に行くので、活動そのものが福祉の理解や啓発にもつながります。共に生きる社会をつくるのに、ご本人さんのありのままのパワーが社会を動かすことを実感しています。そのパワーを発揮できるようにするのが私たちの使命だと思っています。

取材日 2021年2月19日